

# 早稲田大學東洋哲學會 第三十二回大會

〔日時〕 平成二十八年六月十一日（土曜日）午前十一時より  
〔会場〕 早稲田大學文學學術院 三十三號館三階 第一會議室

## 〈研究發表および講演要旨〉

### 【研究發表】

『禮記』 燕義篇の成書過程と「義」の役割

黒崎 惠輔

經書『禮記』四十九篇中であつて篇題に「義」を含む各篇の行論は、「禮經」とも稱される『儀禮』と密接に關連する。そのうち『禮記』燕義篇は、『儀禮』燕禮篇の意義を説くものである。本發表では、燕義篇にまつわる錯簡問題について、その成書過程に着目し、『周禮』の竄入部分を檢證する。その上で、本來は『儀禮』燕禮篇の意義を經文に即して説くものであつた燕義篇が『禮記』の一篇に組み込まれる過程において、そこに付加された新たな役割について論及する。

江西時代における王陽明の乞休・歸省疏をめぐって

劉 珉

明代正徳十二年正月から十六年六月まで、王陽明は江西にいて、兵馬倥傯の月日を送つた。彼の「江西時代」と言われるものである。この時代を通して彼は有名な「致良知」説を練り上げたが、まさにこの時期に歸郷も強く願つていた。四年半の間、彼は少なくとも八回も歸郷を皇帝に奏請し、友人に對しても事に觸れてそれに言及してゐた。本發表では、陽明の乞休・歸省疏やその關連資料を利用して、從來必ずしも明確でなかつたその間の事情を明らかにし、彼の望郷の念と思想との關係を考察したい。

法藏撰『梵網經菩薩戒本疏』の特色について——智顛說『菩薩戒義疏』との比較——

胡 建明

從來、法藏が大成した華嚴教學は、智顛の天台教學を強く意識したものであり、とりわけ天台の四教判の上に華嚴の五教判を立てること、『法華經』に説かれた法華一乘を低くし、『華嚴經』から現れた華嚴一乘を褒め稱えるものであると考えられて來た。しかし、宋代の天台學者は、「性起説」だけを説く華嚴の諸師に對して、教理があつても、實踐としての「觀法」が缺け、「有教無觀」であると批判する。法藏が撰じた『本疏』と、智顛が説いた『義疏』に如何なる思想的關連性があるのか、兩者の比較を通して、法藏の大乘戒思想の特色を明らかにしたい。

『溪嵐拾葉集』に見られる禪宗觀——三根についての理解をめぐって——

ステファン・リチャ

本發表は、『溪嵐拾葉集』で言及される禪宗一般に對する批判と、圓爾（一一〇二～一一八〇）の教學に對する評價とを、機根論を中心として考察する。『溪嵐拾葉集』では、日本天台の立場から「禪」をして教外別傳「佛と佛との境界」であるとし、下根の衆生を導くことは不可能であると見做すのである。その批判に對する圓爾の立場は、天台による批判を概ね受け入れるものの、圓爾禪では三種方便を用いるため、下根をも救うことができると主張し、一般的な禪宗との差別化を図るのである。このように『溪嵐拾葉集』は、今迄あまり注目されることのなかつた禪宗に關する記録が残されていることから、初期日本禪宗の展開を知る上で重要な文獻と言える。

## マドウスーダナ・サラスヴァティーによるアートマンの四状態説の構造

眞鍋 智裕

インド哲學學派の一つ不二元論學派において、『マインドウーキヤ・ウパニシャッド』に基づく「アートマンの四状態説」と言われる教義がある。この教義は修行論や世界の創造・歸滅論として展開していくが、十六世紀の不二元論者マドウスーダナ・サラスヴァティーも、その著作においてこの「アートマンの四状態説」を説いている。しかし彼以前、あるいは同時代の不二元論文獻と比較すると、彼独自の見解が見られる。本発表では、彼の著作と他の不二元論文獻とを比較することによって、彼独自の見解に關して考察を加える。

## 安慧の「識の顯現」への視點

——*Māhātmyānirvāṇaśāstra* における *nir-vāṇa* の用法について——

伊藤 康裕

唯識説において「顯現」とは、識においてなんらかの形象が顯れること、または、そのような形象を生み出す識のはたらきを意味する。*Māhātmyānirvāṇa* (『中正と兩極端との辨別』)の復註 *Māhātmyānirvāṇaśāstra* の中で「識の顯現」をかたる際、安慧 (Shīramatī ca. 510-570) は *prati-vāṇa*, *nir-vāṇa*, *prati-vāṇa* などのいくつかの術語を意圖的に使い分けている。したがってそこには「顯現」に對する安慧獨特の見解が反映されていることが豫料される。本発表は、特に *nir-vāṇa* の用例に着目し、安慧がどのような觀點のもとで使い分けているのかをあきらかにすることを通じて、安慧の唯識説の特徴の一端を示すことを目的とする。

## 羅欽順『困知記』に内在する理論的矛盾をめぐって

金 香花

黄宗羲の『明儒學案』は明代儒教研究の指針とされてきたが、ここでは羅欽順の心性論がその理氣論と矛盾するとしていて、それは黄宗羲の師の劉宗周と軌を一にするものであった。このような見方に對しては何人かの研究者が問題視してはきたが、多くは黄、劉の見解に引きずられ、十分な検討が行われているとは言い難かった。本発表では羅欽順の理論體系が矛盾をはらんでいるものではなく、十分な整合性を持っていること、また羅欽順の氣一元論がいかなる性格のものであるかを、羅欽順自身の著作に基づきながら論證したい。

## 【講演】

## 最澄と空海

武内 孝善

天台宗の開祖・最澄と眞言宗の開祖・空海は、ときを同じくして入唐し、それぞれ密教をわが國へ傳えた。最澄が歸國すると、桓武天皇は専門の天台法門ではなく、歸國する直前に受法した密教に注目し、密教の弟子の養成をも命じた。そこに空海が歸國し、入京を許された大同四年から兩者の交友がはじまる。しかし、五年後には残念な結末を迎えた。なぜ訣別したのか。二人の交友を中心に、九世紀初頭の天台・眞言兩宗の交流史に再検討を加えてみたい。